

2

年生

Studies in Sustainable Society I

持続可能な社会の探究 I

1年次の学習をふまえて生徒自身が設定したテーマについて、同じようなテーマを設定した仲間と協働し、1年間じっくりと探究していく「総合的な学習の時間」です。「グローバル地理」で身につけた探究の技能を向上させつつ、探究を深めていきます。講座単位の活動になるため、対話を大切に、生徒それぞれの探究を支援しています。

STEP 01 設定したテーマについて調査する

基礎調査



フィールドワーク

テーマに関する疑問を見つけ、その答えを探す

探究をスタートするにあたり、書籍やWebサイト、学術論文、各種報告書などを通して、探究テーマに関する基礎情報にふれることを大切にしています。最初は基本的な内容を扱った書籍やWebサイトなるべく多く目を通し、徐々に専門的な内容を扱う学術論文や報告書などに手を伸ばしていくことにより、探究成果を裾野の広い創造性を持ったものにすることができます。

基礎調査を生徒任せにすると、利便性の高さからWebサイトでの調査に偏りがちです。しかし、批判的思考力を適切に養うためには様々な方法で調査を行うことが大切です。そのため、たとえば「5月までは書籍のみを通して基礎調査をする」といったように、Webサイトによらない基礎調査をする時間を確保することを試みている講座もあります。

また、基礎調査を通して生じた疑問点などを記録に残せるよう、あらかじめフォーマットを用意し、探究を深めていくきっかけをつかめるよう工夫しています。そうすることで、のちに行うフィールドワークを、基礎調査で生じた疑問点を解消するだけでなく、自分なりの解答や意見に対して専門家から評価を受ける機会として活用することが可能になります。つまり、基礎調査は知識を得るだけでなく、疑問やそれに対する自分の意見を持つことが目的と言えます。

専門家の意見を聞き、現場を体験し、自分の考えを見直す

フィールドワークは、探究テーマと関係の深い官公庁や企業、NGO、NPO等の機関の専門家に、基礎調査で生じた疑問や意見を伝え、それに対する回答を得ることでより深い学びにつなげていくことを目的としているため、生徒によって訪問先は異なります。グループごとに訪問先を選び、訪問先と交渉してアポイントメントを取り、フィールドワークを行うよう指導しています。

「持続可能な社会の探究I」では、5月に全員がフィールドワークを行うよう年間計画を組んでいます。フィールドワークの事前準備は生徒が行いますが、その前に電話の仕方やメールの書き方、アポイントメントの取り方、お礼の仕方といったマナーを指導します。フィールドワークの希望日の2〜3ヶ月前に連絡すること、複数のアポイントメントが同日同時間で重なることがないようにすること、返答の期限を伝えることなど、大人にとって当然のことも丁寧に指導していくことが重要です。また、複数のグループが、同一の場所にそれぞれアポイントメントを取り、先方にご迷惑をおかけしないよう、生徒が先方と交渉に入る前に、希望する訪問先等を把握し、同じ機関を訪問しようとしているグループがあれば、1つのグループとなって交渉するよう指導しています。

アポイントメントがとれたら、行程表に訪

問先までの経路や緊急連絡先などを記入させ、当日の安全管理体制を作ります。書籍等で調べれば分かるようなことを聞くことがないよう、行程表には訪問の目的や質問事項を記入する欄を設け、記入内容を事前に講座担当の教諭が確認しています。この作業を通して、基礎調査により得た自分の意見や仮説を明確にすることもできます。

フィールドワーク終了後にお礼の手紙またはメールを出す際、探究活動が進んだ段階で再度訪問したい旨を伝えておくと、探究活動の成果を客観的に評価してもらう機会を作ることにつながります。



行程表の例

STEP 01 設定したテーマについて調査する

STEP 02 探究活動を繰り返し、深める

STEP 03 探究の成果を伝える・振り返る・
新たな課題を発見する

1年をかけてSTEP01からSTEP03へ進むとともに、それぞれのSTEPの中でもSTEP01・STEP02・STEP03の活動を行えるように年間計画を立てています。

テーマ設定に関する 報告会

テーマの再設定

フィールドワークの成果を共有し、 テーマを多面的にとらえ直す

基礎調査とフィールドワークが終わった段階で一度、領域単位で報告会を実施します。自分の得た知見を他者に伝えることができるよう準備をすることを通して、自分の考えを体系的に整理することができます。また、様々な探究テーマに関する報告を聞くことは、自分のテーマ設定について客観的にとらえ直すことにつながります。報告会では質疑応答の時間を設け、質問に的確に答える力だけでなく、質の高い質問をする力を身につける機会にできるよう工夫しています。また、効果的な発信ができるようになるために、プレゼンテーションに関するルーブリックを作っておき相互評価を行っています。ルーブリックは評価のしやすさを重視したシンプルなものであるほど、報告会をスムーズに進めることができます。報告会終了後には自己評価を行います。相互評価と自己評価とを比較させることにより、発信力・評価力の向上につながっています。

探究活動の内容を決める

テーマ設定に関する報告会をふまえ、これまでの探究活動を振り返ります。とりわけ設定したテーマが適切かどうかについては必ず考えさせるようにし、必要があれば再設定をうながします。場合によっては全く異なるテーマに変更することもあります。なるべくこれまでの基礎調査やフィールドワークを活かせるよう、テーマをより具体的にする、要素を絞り込むなど、できるだけ探究活動に連続性を持たせるように働きかけています。テーマを再設定したら、今後の探究活動の計画を立てます。その際、フォーマットを用意しておく、それぞれの生徒の探究活動の進捗状況を把握しやすくなりますし、ポートフォリオ評価にもつながります。

「調査・フィールドワーク・成果報告・振り返り」を探究活動の基本サイクルとし、年間で3回程度このサイクルを経験できるように働きかけることで、探究活動の質が向上し、より深い学びにつながります。



公益財団法人WWFジャパンへの訪問。生態系保全の現状を調査。



株式会社セフティライフにて管理栄養士に健康と食についてインタビュー。



東京大学医科学研究所を訪問。研究室を見学し、研究者からお話をうかがう。



特定非営利活動法人JENへの訪問。現場の目から見た難民支援を調査。



報告会は領域ごとに行います。スライド使用の有無など、形式は目的により異なります。



テーマの再設定をすると、探究活動の一連の流れを一回実施することになります。



経済発展と環境

Economic Development and the Environment

大

気汚染、森林破壊、地球温暖化などの環境問題、資源・エネルギー問題、地震・風水害などの自然災害と防災・減災について、その発生メカニズムや因果関係を明らかにしながら、解決方法を考え提案することを目標とする講座です。4月は受講者それぞれが自ら設定した様々な探究テーマを共有することからスタートします。7月以降は、探究テーマが類似する生徒同士が4～5人のグループに分かれ、グループ単位で探究を深めていきます。文献による調査だけでなく、大学の研究室を訪問するなど専門家の意見を直接伺うこ

とやアンケート調査の実施などにより多くの一次情報を取得します。探究活動の成果は、論文やWebページを作成し、外部コンテストを活用して広く社会に発信していきます。

グループ単位の活動では、生徒同士の意見がぶつかり、進むべき方向を見失うこともあります。課題解決に向けた議論・探究を重ねることにより、協働する力やコミュニケーション能力を伸ばすことができると考えています。また、他者の異なる意見をまとめる経験は、リーダーシップを備えた人材の育成には欠かせないと感じています。

本講座の生徒が取り組んだ具体的な探究テーマの一例をご紹介します。

「うなぎ×サステナブルシーフード＝うなブル」(第20回中学高校Webコンテスト総務大臣賞)では、ウナギを未来に残し、持続可能な水産資源としていくための課題とその解決方法について情報発信を行いました。

「効率のよい配達で環境への負荷を減らせるか!？」(中央大学主催第17回地球環境論文賞・最優秀賞)では、再配達の問題を労働環境だけでなく運送にかかるコストや環境負荷という観点から捉え、今後の配送のあり方について提案しました。

「ふくのはなし」(第18回中学高校Webコンテスト経済産業大臣賞)では、「服」と環境問題の関係を掘り下げ、倫理的消費を促すための情報発信を行いました。このテーマに取り組んだ生徒は、卒業後にカンボジアやラオスの繊維工場を実際に訪問し、労働環境の実態を調査するなど、探究活動を続けています。



生徒同士や特別講師と議論する機会を大切にしています。



外部コンテストの活用 (全国中学 Web コンテストの活用事例)

「経済発展と環境」講座では、探究成果を発信する場の一つとして、特定非営利活動法人学校インターネット教育推進協会主催の「全国中学高校Web コンテスト」に参加しています。同コンテストは1998年から20年以上続いているICTを活用した探究学習のコンテストです。生徒は、協働して1つ

の作品を仕上げていくことを通して、自分ひとりでは気づけなかった新たな視点を獲得し、探究を深めていきます。中間審査や最終審査を通じてフィードバックされる大学の先生方からのアドバイスや客観的評価は、生徒のモチベーションを向上させ、探究の質を高めることに役立っています。



「うなぎ×サステナブルシーフード＝うなブル」(総務大臣賞受賞作品)

生命・医療・衛生

Life, Health and Medical Care

生 命倫理・保健医療・公衆衛生に関するグローバルな諸課題について探究活動を行っています。選択者には医歯薬学系・保健衛生系への進路を希望している生徒が多く、探究テーマも多岐にわたっているのがこの講座の特徴です。

1学期中は、生徒が自身の探究テーマに固執せず、幅広く基礎知識や見聞を広め、多角的な視点をもてるよう働きかけています。外部講師や外部施設(研究機関、病院、資料館、企業等)に協力を仰ぎ、専門家による講義やフィールドワーク(以下FW)を積極的に導入しています。全員で共通した内容を見聞きし、学んだことをグループ単位でディスカッションするなどして振り返ることで学習を深め、講座全体で共有できるよう心がけています。このような活動を通して、生命・医療・衛生に関するグローバルな諸課題は、相互に密接に関連しており、その解決方法を一つの側面からのみ探るだけでは根本的な解決には結びつかない

いことに気づかせています。

夏休みには1学期の学習をふまえ、自身の探究テーマに関連する書籍を2冊以上読んだうえでプレ論文を執筆します。これは生徒が2学期以降の探究活動の方向性を定めることをねらいとしています。2学期以降は探究テーマの具体化や修正を行い、グループ単位で書籍、インターネット、FW、アンケート調査等を利用して情報収集をさらに進めます。得られた情報をまとめ、それらをもとに冬休みには本論文を執筆することで、自身の探究テーマについて掘り下げ、課題解決のために有効なアプローチについての考察を深めます。

3学期には年間の探究活動の総まとめとして、論文を作成し、探究成果の発信や啓発活動に取り組み、それらを講座内発表会で共有します。発表会では全員が話し手・聞き手の両方を務める機会を十分に確保し、どうすれば探究成果を効果的に相手に伝えられるか、そのため的手段や工夫を試行錯誤しながら、表



グループワークやフィールドワークなど物事の本質や根幹に触れる機会を多く与えています。

現力やコミュニケーション力、プレゼンテーション力の向上・定着をめざします。探究活動の成果や取り組みに対する相互評価を生徒同士で実施するほか、グループ単位で執筆した本論文は「講座内論文集」として冊子にまとめ、全員の共通の成果物として配付しています。

相互評価の活用により、生徒の探究を深め、発信力を鍛える

「持続可能な社会の探究I」では報告会等でルーブリックを用いた相互評価を行っています。相互評価の特徴は、自らの探究活動を他の生徒が評価することと、自分自身も評価者として他者を評価することです。この仕組みによって、ルーブリック評価項目をきちんと理解させること、探究内容の

深化や発信力の強化を促す場面を増やすことができます。生徒たちは「発表時間内に収まるようになってるか」「私たちの探究活動内容を伝えるうえで必要な情報が適切に盛り込まれているか」などを考慮しながらプレゼンテーションの準備をしますが、他の生徒の発表を評価する場合も準

備段階と同様な意識で聞き、できる限り客観的に評価しようと努力します。相互評価を行うことで少ない発表等の機会をより濃密な学びの時間にすることができ、他者からの評価と自ら発表を行い感じた課題をそれぞれ分析して今後の発表や探究活動に生かすことができます。



経済と人権領域の探究活動

Economy and Human Rights

国際協力とジェンダー

International Cooperation and Gender issues

世 世界各地で生じている貧困や紛争、女性の地位の低さなどの社会課題についてジェンダーの視点で現状を理解し、その課題解決方法について探究していく講座です。世界の社会課題の解決・解消に向けて私たちにどのような貢献ができるか、幅広い角度から探究していきます。また、その過程や成果について対外的に発信していく力を養うことも目的としています。

実社会を学びの場として学習に取り組むことを促すため、外部機関との連携に重きをおいています。社会課題をジェンダーの視点で分析する力を培うため、お茶の水女子大学をはじめとする大学の先生方などの専門家による特別講義を実施し、表象リテラシー、宗教・風習・習慣と国際協力のあり方、政治・経済やその時々社会情勢とジェンダーの関係性など多角的にとらえる視点などを学んでいます。それぞれの講義の後には、ディスカッションを行い、理解と考察を深められるよう工夫しています。また、NGOなどを訪問するフィールドワークを

通して、国際協力のキーワードである国連SDGsについて体験的に学ぶ機会を設けています。

ジェンダー問題は多岐にわたっているため、授業時間だけでは基礎的な知識を担保することができません。そこで、ジェンダーに関する著書を読むことを課し、考えたことを発表しあう活動も実施しています。こうした活動は、基礎知識を身につけるとともに、主体的に探究に向き合う姿勢を培い、プレゼンテーションファイルの作成や発表の技能を鍛えることにもつながっています。

探究の成果を発信する活動として、ジェンダー問題啓発イベントの開催や、啓発商品の開発・販売などを行ったこともありました。こうした活動を通じて、必要に応じて他者と協働して活動を進めることの大切さを体験し、主体的かつ協働的な探究活動を進める方法をより意識化していくことが可能になります。また、イベントの後援等としても、官公庁、企業、NGOと連携し、ご協力をいただいています。教員が事前に交渉先を把握し



啓発イベントの実施やカンボジアの子どもたち用の教材作成などの活動に取り組みました。

必要に応じてサポートはしますが、交渉は生徒たちが行っています。外部機関と連携し、社会に開かれた学びの場を提供することにより、生徒の行動力を引き出しながら、探究を深めていけるよう支援しています。

生徒の負担を考慮したカリキュラムマネジメントを

探究的な学習には終わりがありません。探究をしていくと、新たな疑問や課題を発見するからです。熱心に取り組む、探究を深めていこうとすると、無限に時間をかけることができます。本校では、夏休みや冬休みの課題、中間報告会や外部コンテスト、

イベントの準備等に時間をかける傾向が見られます。生徒の健康や他の教科目の学習、特別活動等に配慮しつつ、生徒が積極的に探究活動に取り組める体制を整えるためには、学校全体の動きを見通した年間計画の作成が必要であると感じています。



国際関係と課題解決

International Relations and Resolution

貧

困、難民、テロ、人権、軍縮、食糧、移民といった多国間にまたがる国際的課題について、具体的かつ現実的な解決策を考えることを探究テーマとしています。

生徒は、最初にそれぞれの探究テーマに関する基礎調査を行い、調査から得たその時点での自身の意見や仮説に対して、官公庁や企業、関係機関などを訪問して評価を受けます。また、企業や関係機関の方を招いての特別授業も実施します。その際、テーマ設定や活動内容、使用するワークシートの工夫など、事前に詳細な打ち合わせをして担当教員と講師がイメージを共有し、特別授業が生徒にとってただ話を聞くだけのものにならないようにすることが大切です。

次に、探究テーマとしている国際的課題の構造をモデル化したマップを作成します。この時、各国政府の総合的判断の結果の賛成・反対という立場をマップに

するのではなく、課題の構成要素を考え、具体的かつ現実的な解決につながるような要素に関する立場をマップにするよう指導しています。さらに、グループで探究活動を行っている場合は、1人に1つの担当国を割り当て、それぞれの生徒が担当国の立場から探究テーマを掘り下げるよう調査を行い、担当国の立場を主張し合いながら解決への方向性を見出す、多国間交渉を模した学習活動も取り入れています。

こうした活動を通してより具体的かつ現実的な解決策を考え、最後にその解決策に対する意見や評価をもらうことを目的としたフィールドワークを行い、自身の探究活動を客観的に振り返るよう指導しています。

国際的課題は、歴史や民族、政治状況などによって国の立場がそれぞれ異なるため、単純な正論で解決するわけではありません。そのため、多くの国の状況を把

握し、より多くの国が賛同できるような解決策を考えていくことが求められます。このように様々な要因・立場・方法について探究活動を行なうことにより、論理的かつ複眼的に課題解決に向けてアプローチできる、将来のグローバル・リーダーを育成することが、この講座の目標です。



探究活動の成果を他者に伝える機会を多く設けることは、より深い探究活動につながります。

企業と高校が連携する 日本アイ・ビー・エム 塚本亜紀様

お茶の水女子大学附属高等学校様とは、弊社が実施している高校生向けのグローバル人材育成セミナーに生徒さんをご参加いただいたご縁で、SGH開始当初より一緒させていただいております。「国際関係と課題解決」という広いテーマの中で、社員のグローバルな協働の事例をご紹介しながら、演習を通じて、異文化コミュニケーションにおいて実際に課題となってくるのはどういう点かを実感していただく

という試みを行いました。限られた時間ではありますが、このような活動を通じて生徒さんには、総論としての「グローバル」ではなく、弊社の社員が実際に苦労したり工夫したりしている生の声をお伝えすることにより、協働の状況や相手を想定した課題やそれを乗り越えるための具体的なヒントに触れていただく機会をご提供したいと考えました。また、弊社の社員にとっても、自らの体験を改めて振り返り、生徒さんにお伝え



することにより、自分の仕事の意義や学びについて改めて考える貴重な時間となり、感謝しております。



文化と表現領域の探究活動

Culture and Expression

情報技術と創造力

Information Technology and Creativity

こ れまでに先人たちが築き上げてきた「科学」「技術」を「創造」的に用いて、「社会」にある諸問題を改善・解決すべく課題に取り組むことをめざす講座です。また、この講座における探究活動を通して、論理的思考力とICT活用能力も培っていきます。

プログラミングをはじめとした技術は、これまで日常的にICTと関わってきた密度によって個人差が大きく、1人で取り組んだ方が目に見える成果を出しやすいこともあります。しかし、この講座では、グループで取り組む時に遭遇する様々な問題に対処しながら、複眼的視野を活かし、協力して課題を解決していくことを重視しています。

同じ興味を持つ生徒でグループを構



機械学習に関する講義とExcelによる機械学習の演習。



成し、探究活動を進めます。教員が必要な技術や知識を指導したり、企業から外部講師を招いたりすることもあります。必ずしもそれら全てを活用する必要はありません。生徒は自身の興味・関心を原点として、必要に応じてそれらの技術や知識を使用していけばよいと考えています。

また、さらにある事柄や技術について追いたい場合は、生徒が主体的にフィールドワークを行い、必要なハードウェアやソフトウェアの導入を教員に進言することもあります。こうした生徒の自発的な学びに向かう行動を教員がうまくサポートしていくことが大切です。

探究的な活動を通して学んだこと 情報技術と創造力講座 遠藤光

私はプログラミングの技術が十分でなかったため、今まで使ったことのなかったC言語を学びながら、アプリの作成に挑戦しました。自宅にSwiftに対応できるPCがなかったため、家でコードを考えて書き出し、学校に来てPCで試して全く思い通りに動かず頭を抱えることもありましたが、入力したコードが正しく動いた時には、モノづくりの楽しさ、喜びを感じることができました。

探究の過程で、憧れのサイバーディフェンス研究所を訪問し、お忙しい方々から様々なお話をうかがい、ご助言を得ることができました。辛い時も投げ出さず

最後までやり遂げることができたのは、自分の探究を支えてくださっている方々のためにも、何としても実りあるものになりたいと強く思っていたからではないかと思えます。

探究活動を通して、物を作る時には明確なイメージを持つことがとても大切であることを学びました。また、計画を立てて行動すると同時に、うまくいかない時に柔軟に対応することの大切さを学ぶこともできました。できることとできないことは探究の過程で明らかになってくるので、そこからできあがりのイメージや計画を調整しなくてはなりません。そうした調



SGH成果発表会において情報セキュリティに関する探究の成果を発表しました。

整のためにメンバーとコミュニケーションをとることも、貴重な経験だったと感じています。

音楽のグローバル化

The Globalization of Music

この講座では、「研究とは何か」「議論の進め方」「論文の作法」という3つのテーマを中心に、実際に研究を進める際に必要とされるスキルの獲得を目指した活動を行っています。

「音楽」は非常に多義な概念を持っており、そこに社会的な課題を見出すことには多少の困難が伴います。生徒たちは、興味ある分野の中に内包された諸問題をピンポイントで焙り出すために、文献等

を「否定的・批判的な目」で読み込み、「研究題目」を実際に作ってみるなどの作業を通して課題を明確化し、どのような事柄が「研究」となり得るのかということを探ります。

さらに、表現力と理解力の伸長を図るため、参加者全員で同一の問題について質疑と議論を重ねる「ゼミナール方式」によって探究を掘り下げています。事柄を順序立てて説明していくこと、それらに

自論で呼応していく思考過程、また論を戦わせる際の作法などは、自己表現のための最も必要なスキルであり、協働的学習で得られる効果として本質的なものと言えるのではないのでしょうか。

これらに、最終目標である「論文」の執筆も加え、授業で身につけた「表現のための基礎的なスキル」が、生涯にわたって活用されることを期待しています。

言語に依存しない情報発信

Art and Expression (non-verbal communication)

言語に依存しない方法を用いた解決策を模索することを共通のテーマとして掲げ、生徒の多様な興味・関心にそって選ばれた探究テーマに対応しています。これまでに生徒が取り組んだ探究テーマとしては、「車いす利用者も安心して観戦できるスタジアム」、「視覚障害者が安全に利用できる駅ホーム」、「子どもが安心して利用できる病院づくり」などがあり、設計やデザインの工夫による解決策を提案する生徒が多く見られました。

生徒は、それぞれの探究テーマに

そって、解決すべき点を発見し、それを分析して問題の本質を見極め、解決するためのアイデアを創意工夫し、提案できるよう探究活動を行っています。問題を分析する過程には、コンピュータによる図解化の手法を取り入れ、作図により問題点を明らかにしたうえで解決方法を考える活動を組み込み、具体的な改善案を提案することを重視した指導を行っています。

また、講座に所属する全員で探究テーマやその背景にある社会の状況などについて検討する機会を設け、それぞれの

探究テーマをより広い視野からとらえ直すことができるよう支援しています。一連の活動を通して、グローバルな諸課題を解決する多様な手法に気づくことが、この講座の目標です。



STEP 03

探究の成果を伝える・振り返る・
新たな課題を発見する

1 論文を作成する

正確な論文の作成には、探究記録の積み重ねが必要

論文の作成にあたっては、探究動機と目的、探究の方法、探究の成果と課題・展望、引用・参考文献といった項目をふくむフォーマットを用意します。論文は探究活動が終了してから書き始めるのではなく、探究活動をしながらかつ成果を少しずつ文章にしていくよう指導しています。そうすることで、負担が分散されるとともに、論文作成が記録や振り返りの機会ともなり、探究を深めることが

できます。そのため、アカデミックライティングについては探究活動の初期の段階で指導しています。とりわけ引用・参考文献の書き方については、「図書館の活用法」での学びを振り返りつつ、書き方次第では剽窃・盗用とされることを確認します。正確な出典を記すためにも、調査のたびに記録を残すことの必要性をあらかじめ伝えておくことが大切です。



2 発表会で成果を発表する

成果発表会等の機会を設け、大勢の人に伝える力を鍛える

本校では3月に成果発表会を実施し、保護者や大学の先生方、近隣の中学生等を招待して、探究の成果を発表する機会を設けています。講座全体の活動や、代表者の探究の成果を発表し、来場者から高い評価を得ています。これは、年間計画に講座内あるいは領域内の発表会を2回以上組み込み、全ての生徒にプレゼンテーションをする機会、プレゼンテーションを評価する機会を

複数回与えている効果だと考えています。5月の報告会では、原稿を読みながら下を向いて報告する生徒や、スライドに情報を詰め込み過ぎてしまう生徒が多く見られますが、相互評価や教員からの指導を通して発信力を高め、3月の発表会では聞き手に最も伝えたいことを伝えられる発表ができるように成長しています。



3月に行う成果発表は大学講堂にて行います。発表は日本語か英語、どちらで行ってもよいことにしています。



3 異学年と交流する

異学年交流を通して自分の成長を意識し、次の目標を明確にする

成果発表会后、講座ごとに、1年間探究的な学習に取り組んできた2年生が、次年度その講座で活動する1年生に対して、自分の探究の成果を発表する機会を設けています。その際、2年生がプレゼンテーションを行うだけでなく、探究の内容や手法について、1年生と2年生が活発な質疑応答、自由な意見交換を行う交流の時間を十分に取れるよう、ゆとりをもったスケジュールを組ん

でいます。それはこの異学年交流は、1年生が1年間の探究的な学習のイメージを理解する機会になるだけでなく、2年生が発信や対話を通じて、1年間の探究的な学習を振り返り、自分がどのように成長したかを意識化する大切な機会にもなるからです。成長を意識化することにより、次の目標を明確にし、「持続可能な社会の探究II」に取り組むことが可能になります。



大勢に伝える方法とは異なる伝え方で目の前の1年生に伝えることにより、プレゼンテーションの技能も鍛えられます。